

2025年度 広島市立大学 外国人留学生選抜  
(国際学部)

小 論 文 (120分)

2025年2月25日

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この問題冊子は 6 ページあります。  
試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合には、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 3 解答用紙は 4 枚です。解答はすべて解答用紙の所定の場所に記入しなさい。
- 4 解答用紙とは別に、下書用紙が 3 枚あります。必要に応じて自由に使用しなさい。
- 5 受験番号は、すべての解答用紙の所定の欄に必ず記入しなさい。
- 6 解答用紙は持ち出してはいけません。
- 7 配付した解答用紙は、試験終了後にすべて回収します。
- 8 試験終了後、問題冊子、下書用紙は持ち帰りなさい。

このページは空白である。

## 第1問

つぎの文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

不健康な量のお酒を飲む女性が増えている。特に〔 ① 〕代で増加が目立つ。女性が本格的に社会進出し、仕事も飲み会も男性並みにこなしてきた世代だ。生活習慣病のリスクを高める量のお酒を飲む女性の割合が男性を上回ったとの東京都の調査もある。女性は一般的に男性に比べてアルコールの分解速度が遅く身体に大きな負担がかかりやすい。女性に多い非正規社員などの健康診断の機会も不十分で、問題が見逃される恐れもある。

厚生労働省が2024年2月に発表した飲酒ガイドラインでは、生活習慣病のリスクを高める飲酒量について、1日あたりの純アルコール量で女性は20グラム以上と、男性の40グラム以上の半分とした。ビールだと中ジョッキ1杯、ワインだと小グラス2杯程度にあたるが、十分に周知されているとはいえない。

大手医療系企業に勤める女性(60)は「お酒は<sup>(a)</sup>マイペースに楽しんできた」。1986年に施行され、職場での性別による差別を禁止した男女雇用機会均等法の第1世代だ。男性社員の多い職場で、課長クラスだった35～50歳ごろは飲み会の頻度が増えた。一度にワインボトル1本弱を空けることもあったという。

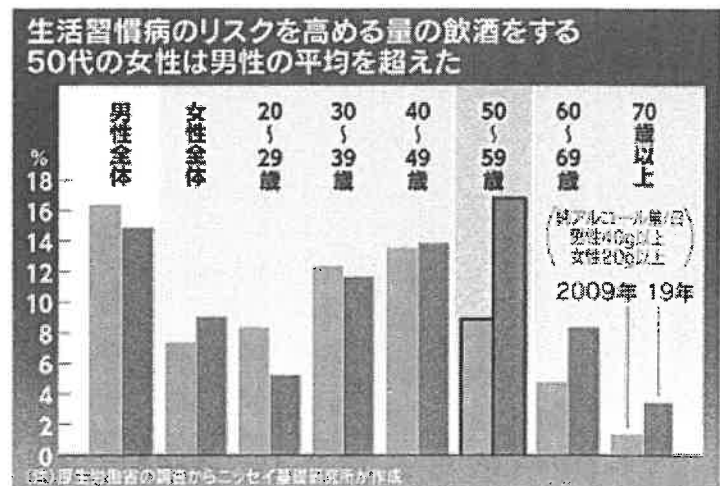
ニッセイ基礎研究所の村松容子主任研究員が厚生労働省の調査をもとに計算したところ、生活習慣病のリスクを高める量の飲酒をしている人の割合は、2009年から2019年の10年間で男性全体では〔 ② 〕のに対し、女性全体では増えた。

年代別では女性は40代で増加に〔 ③ 〕。特に50代の女性で大幅に上昇し、8.9%から16.8%へとほぼ〔 ④ 〕。男性の平均14.9%をも上回った。対照的に20～30代女性は減っている。もともと妊娠や授乳などで飲酒機会が少ないのに加え、昨今の若者を中心とする日本人の「酒離れ」の傾向が強く出たかたちだ。

村松氏は「中高年女性の飲酒が増えたのは、均等法施行以降の女性の社会進出と裏腹。働きながら、自分のお金で自由にお酒を飲むのは良い面もあるが、健康への影響は見逃せない」と指摘する。

東京都の5年に1度の調査でも、生活習慣病のリスクを高める量の飲酒をしている人の割合は2021年度に女性全体で17.7%に上り、<sup>(b)</sup>さかのぼれる2011年度以来、初めて男性全体を〔 ⑤ 〕。

不健康な飲酒は女性を<sup>むしろ</sup>蝕む。新型コロナウイルス禍が女性の飲酒の機会を増やし、アルコールが関連する病気を増加させた可能性もある。京都大学の研究グループがコロナ流行期の2020



年4～6月にアルコール関連の肝疾患と<sup>すいえん</sup>膵炎による入院率を男女別に前年同月比で比べたところ、男性は最大1.2倍だったが、女性は同2.0倍に達した。

アルコール依存症治療で知られる久里浜医療センターの木村充副院長は「同じ量の飲酒でも女性のほうが肝硬変など肝臓の病気や依存症に発展しやすい。女性に多い乳がんの発症リスクも高める」と指摘。女性の依存症患者を支援する「オ、ハナ」の棚原可奈子施設長は「家での飲酒は(c)ブレーキがかかりにくい。在宅勤務と家事の両方でストレスを抱え、酒量が増えた人が多い」とみる。

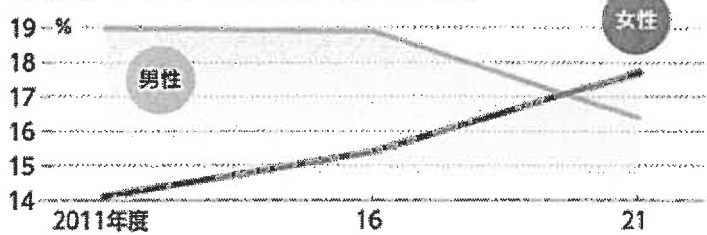
こうした心身の変化を発見する機会に定期的な健康診断があるが、男性に比べ女性はその機会に恵まれていない。

厚生労働省の2022年の調査によると、正社員では男女ともに9割に受診機会があるが、女性に多い非正規社員や専業主婦は5～7割程度にとどまる。社会保険に詳しい同志社大学の佐々木一郎教授は「正社員とそれ以外の職種では、年金などと同様、健康面でも安全網に大きな差がある」と話す。

出典：平野麻理子「不健康な飲酒、女性蝕む 50代は倍増 社会進出、仕事も飲み会も」『日本経済新聞』2024年6月16日より抜粋。必要に応じて表現等を変えてある。

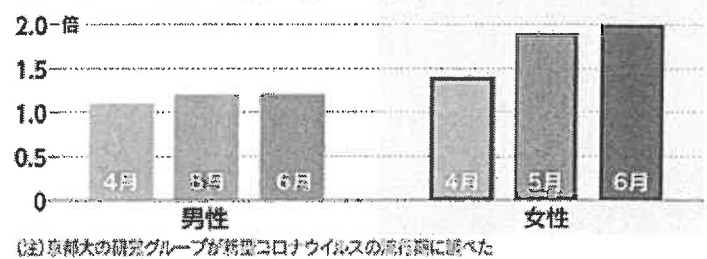
#### 東京都では女性が男性を逆転した

(生活習慣病のリスクを高める量の飲酒をする割合、出所は東京都)



#### コロナ禍で肝疾患と膵炎による女性の入院が急増した

(1000人あたりのアルコール関連の入院率、前年同月比、2020年)



(注) 京都大の研究グループが新型コロナウイルスの流行期に調べた

問1 空欄①～⑤をそれぞれ埋めなさい。(4点×5)

問2 下線部(a)「マイペース」、(b)「さかのぼれる」、(c)「ブレーキ」の意味をそれぞれ20字以内で説明しなさい。(5点×3)

問3 女性が働きながら健康に過ごすために重要なことを、本文にそくして160字以内で書きなさい。(15点)

## 第2問

つぎの文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

なぜ組織不正はなくなるのでしょうか。

組織不正と聞くと、組織の中で誰かが間違った方法で自分の利益になることを思いつき、それが組織全体に広がるものと考えられるかもしれません。そのため、組織不正が発覚した場合には、「この不正を最初に考えたのは誰か」を探し出し、その人の責任を追及するといったことが少なくないように思います。

実際に、このような考え方の下で説明された組織不正というのがあります。2018年のスルガ銀行不正融資事件です。

この事件は、スルガ銀行が投資用不動産の資金を必要としていたオーナーに対して組織的に不正融資を行っていたものです。なぜ不正融資が行われたのかについて、第三者委員会の調査報告書では、当時の営業部門が書類偽装するなどして審査部門に圧力をかけていたり、あるいは審査部門自体もその書類偽装を黙認していたなどと指摘がなされています。

つまり、この場合には、「この不正を最初に考えたのは誰か」として、当時営業部門で働いていた人や審査部門で働いていた人などの責任が問われたのです。

それでは、なぜ人は不正を行ってしまうのでしょうか。不正が行われる理由を明らかにしたモデルとして有名なのが、犯罪学者ドナルド・クレッシーが理論化し、その後公認会計士であったスティーブ・アルブレヒトが精緻化した「不正のトライアングル」です。

このモデルは、人間がなぜ不正に手を染めてしまうのかを三つの要素で説明したものです。

まず、「機会」では不正行為を行う者は、いつ、どのような状況で不正ができるのかという環境を知っているとされます。そして、そのような「機会」において、不正を行うための「動機」を持ち合わせることによって不正行為に至るとされています。ただし、この「動機」とは自分が不正をしようという積極的なものだけではなく、不正せざるを得ない状況に追い込まれた場合のプレッシャーも含んでいます。

したがって、不正をする者は、自分が仕事上の責任を果たせそうになかったり、あるいは他者には打ち明けられない問題を抱えている時などに、「動機（プレッシャー）」をもち、不正に手を染めるのだとされています。

そして、不正をしようとする者は、自らを「正当化」するとも言われています。「正当化」とは、これらの不正行為を行う際に、自分が行ったことに言い訳をすることであり、「このような不正行為を行ったことは仕方のないことだ」などと文字通り自分を「正当化」しようとするのです。

このように「不正のトライアングル」とは、これら三つの要素が結びつくことによって不正が行われることを示したモデルであり、その分かりやすさから一定の支持を得ているものと思います。

ただし、ここで考えたいのは、この三つの要素が仮に結びついたとしても、不正が起きるとは限らないという点です。たしかに、不正の「機会」を発見し、そこに不正を行おうとする「動機（プレッシャー）」があり、それを「正当化」しようとする人がいれば、不正の条件がそろうよう

な気がします。

しかし、仮に三つの要素がそろったとしても、すべての人が不正を行うとは限らず、「こういう不正はやってはいけない」とか「間違った方法ではなく正しい方法で物事を進めたい」など、人間には正しい行為を行おうとする意思があるように思えます。

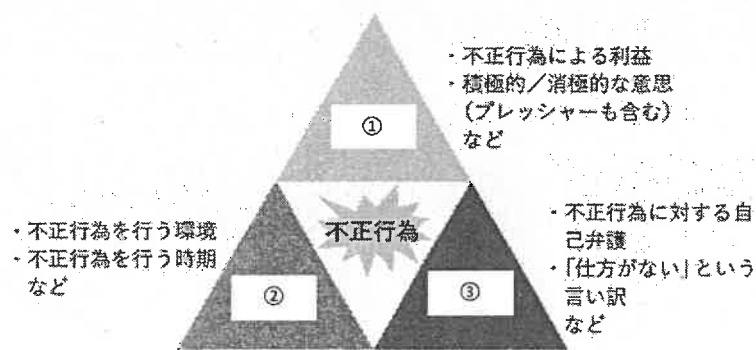
また、このような正しい行為は、それまでの教育においても培われたものでもあり、家庭や学校で他人の物を盗むのは良くないことや他人をだまして自分にだけ便益があるようにしてはいけない（他の人々にもきちんと便益があるように分配しなければならない）といったことを私たちは学んでいるのです。

ここから考えられるのは、不正が本当に「動機」に基づいて行われるものかということです。「不正のトライアングル」でも述べられたように、不正に手を染めようとする人は「動機」をもつと考えられています。

組織不正の場合、これは「意図」として考えられており（同じものですが）、まず初めに不正をしようとする人が意図的に行おうとしたのだと説明されることが少なくありません。

ただし、最近分かってきたことは、不正に手を染めようとした人は必ずしも意図的とは言えないということです。つまり、意図的でないにもかかわらず、組織不正が生じているという奇妙なことが起こっているのです。どういうことなのでしょう。

これまで組織不正は、明確な意図をもった人物が不正に関与し、それが組織全体へと伝達されることで発生すると考えられてきました。しかし、不正に手を染めようとした人は自ら積極的に関与しようとしたのではなく、結果的にそうってしまった（あるいは、そう疑われてもおかしくない状況にあった）と考えられるのです。



出典：中原翔『組織不正はいつも正しい』（光文社、2024 年）より抜粋。必要に応じて表現等を変えてある。

問 1 上記図の空欄①～③をそれぞれ埋めなさい。(5 点×3)

問 2 どのようにすれば組織不正をなくすことができるのか、本文にそくして 400 字以内で論じなさい。(35 点)